

2023 年度年次報告書

社会課題を解決する人間中心インタラクションの創出

2023 年度採択研究代表者

矢谷 浩司

東京大学 大学院工学系研究科

准教授

複数のチャットボットで構成する動機づけ面接環境

## 研究成果の概要

2023 年度においては、さきがけ研究開始前から行なっていた SMARPP プログラムの関係者への質的調査を完了させた。特に SMARPP による血用を受けたことのある経験者に対するインタビューを実施し、SMARPP ファシリテーターから得たデータとの類似点・相違点を確認しながら、分析を行なった。さらにグループ形式の認知行動療法におけるユーザの行動と動機を Self-determination Theory が与えるフレームワークに基づいて分析することで、治療に対する動機に影響する個人内、および対人的トレードオフを明らかにした。さらに、本さきがけ研究で実施している複数チャットボットを用いた動機づけ面接環境のほか、グループ形式で実施される動機づけ面接のファシリテーターのトレーニング支援システムなど、HCI 分野における新たな研究の方向性を明らかにした。本研究成果は国際論文誌に投稿中で、現在(2024 年 5 月時点)で Major revision となっている。

PMS に関係するユーザに向けた複数チャットボットを用いた動機づけ面接環境に関しては、slack 上でのプロトタイプを構築し、システムの挙動を確認する小規模の実験を行い、必要な修正を実施した。このプロトタイプでは、ファシリテーター役のチャットボット 1 つ、ピアユーザ役のチャットボット 2 つと実ユーザ 1 名で動機づけ面接を行う環境を提供する。今後実施する予定の実験はファシリテーター役のチャットボットと実ユーザ 1 名のみで動機づけ面接を行う 1 対 1 形式の環境と、本プロトタイプของกลุ่ม形式の環境を準備し、コミュニケーションの違いや PMS に関する主観的な捉え方の違いを調査する予定である。

また本年度は本さきがけ研究の周知活動も精力的に行った。2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会での招待講演のほか、研究代表者がオウル大学の研究者と共同で主催した Tokyo-Oulu Joint Symposium on Human-AI Interaction にて周知を行い、関連する研究者と意見交換を行った。

### 【代表的な原著論文情報】

- 1) 下島 銀士, 耿 世嫻, 楊 期蘭, 乘濱 駿平, シュラーメク ゼファン, 高野 歩, ホシオ シモ, 矢谷 浩司. 薬物依存症治療におけるデジタル支援に向けた治療経験者への質的調査. 情報処理学会 HCI 研究会, 2023 年 11 月.